

## パフォーマンス

### 「鯛との対話」

#### 概要

一尾の鯛と対面、対決する。想像できる限り、丁寧に、一期一会の過ぎ行く時間の雫のその音の残酷に震えつつ、互いの立場の理解の限界の壁にため息をつきながら、可能な限り相互納得行く公平な協議を取りまとめる、約一時間。とにかく見つめる。鯛は、途中で、面をひっくり返す。そうして、両面の両目を、わたしと対面する。

満足な時間の経過後、その鯛は、決められた運命どおり、シェフによって捌かれ、その身は、その対決に立ち会った観客たちに、供される。

(この場合、観客はいったい、どんな気持ちで、そこに立ち会うのであろう。)

#### コンセプト

生き物と生き物との対話。対等な関係という幾何学はありえない。

たとえば、上演では、観客がパフォーマーを見つめ、そのイメージを観客が、それぞれの感覚、意識や欲望にもとずいて、食する。パフォーマーが、何かを、無理やり観客の口に突っ込むことはできない。観客は、期待した肉を食することができるかどうかは、わからない。また、観客は、パフォーマーに食われてしまうこともある。

関係は、あらかじめ、決まっているようにも見えるし、状況で、あっけなく変化するものでもある。

例えば、生け贄とはなんだろう。犠牲とはなんだろう。生き物どうしの関係性の捉え方は、公正さ、などではとても、つかみきれない。

鯛は皿の上でもう死んでいる、ということになっているが、彼／彼女の肉は、私たちがそれを食することで再生するのだから、生は存在している。つまり、彼／彼女の生は、彼／彼女の体の中で、それはまだらである。一方、それを準備した、わたしは生きているけれど、体の中に死と生はやはり、実際はまだらだ。心臓か、あるいは脳が機能しなくなった時が「死」であるのは、医学と法律の判断であり、ある部分はもっとゆっくりだし、あるいは、もっと早く死んでいる部分もある。つまり、現在のわたしの中で、とうに死んでいる部分もある。

そうした、曖昧な生と死の混成物どおしの私たちは、これから対面する。しかも、当日まで、「どの」鯛様が、わたしの前に現れるか、誰にもわからない、そうした、一期一会である。そして、その一時間は、ほんの一瞬でもある。

刃物を刺すのは、どちらがどちらに。身を捧げるのは、どちらがどちらに。

## インスタレーション

カフェの真ん中あたりに、小さなテーブルを置き、その上に、皿、そして、鯛。氷の敷いた上に置く。身の上にも、氷。

少し離れた場所に、高めの椅子。そこにパフォーマーは座る。白い格好。

間に、サラシにまいた包丁を置く。調理用手袋。

それらをセットするプロセスから、パフォーマンス。

観客は左右。自由な感じで座る。

ほとんどの時間は、パフォーマーが鯛の目をみつめて、約一時間。途中で、鯛の向きを変える。

どのような態度で、時間を過ごすのか。

途中で、氷の減りを見て、庄司さんか阿部店長が、氷を足す。

## プログラム

鯛はイトーヨーカドーに少し前に注文しておく。できうる限り大きくいきの良いお頭尻尾つきの色良い鯛。当日、時間前に取りに行き、代金を払う（山岡）。パフォーマンス終了後、集まった観客の人数割で、代金をシェアしていただく。

捌くのは、店長。

当日は、日本酒も少し仕入れてもらっておけるか？

この代金の件は、案内を送る際に、「時価を頭割する。例えば、5000 円の鯛に、20 名の参加であれば、一人当たり 250 円。台風の場合は、入荷しないので、別の魚になるか、たい焼きになるか、その日の判断で決める」と記す。

19 時半開始、鯛を捌いて分け合う時間を含め、21 時半までに終了。